

みやぎ

仕事人 列伝

チャレンジドジャパン 仙台市

白石 圭太郎さん(36) ①

障害者就労 実現後押し



就労支援センター
ひゅーまにあ

「ひゅーまにあ」のロゴマーク。障害福祉を全国に広めるチャレンジドジャパンの意思を、日本列島をモチーフにした若鳥で表現している

地元経済界をけん引するビジネスパーソンに歩みや信条を聞くシリーズ「みやぎ仕事人列伝」。新年度最初にフォーカスするのは、仙台市を拠点に障害者の就労支援事業を全国展開する「チャレンジドジャパン」社長の白石圭太郎さん(36)です。(3回続き)



全国26カ所で障害者就労支援センター「ひゅーまにあ」を運営する。センターに通うのは、主に精神障害や発達障害、知的障害があり、就職を希望している人たち。ここで生活リズムを整え、パソコンのスキルやビジネスマナーなどを身に付ける。利用は原則公金で賄われ、最長2年間まで通



しらいし・けいたろう 1983年仙台市生まれ。2006年東北大経済学部卒。三菱東京UFJ銀行(当時)に3年勤務。在職中の08年12月に大学時代の友人らとチャレンジドジャパンを創業。09年7月に1カ所目となる就労支援センター「ひゅーまにあ」仙台を開く。15年東北大学院経済学研究科修了。富谷市で妻、娘(3)の3人暮らし。

うことができる。

東北大在学中にボランティアとして関わったのが、障害者福祉の道を志す出発点。知的障害者の場合、特別支援学校を出た後は自宅近くの福祉作業所に通うのが一般的で、就職を含めた選択肢が少ないことに疑問とやり切れなさを感じた。

大手都銀に就職した後も思いは消えず、入行3年目の2008年、大学時代の友人らと共にチャレンジドジャパンを創業。障害者の人生に就職という選択肢を加えるべく、就労支援を社業の柱にした。

就労支援センターを全国

に広げながら、これまでに1500人近くの「就職先を見つけたい」「働きたい」をかなえてきた。就職から半年以上働き続けている定着率は85%と、業界屈指の高率を誇る。

事務部門も含め、スタッフは約150人。その多くが支援員として、利用者一人一人の強みを伸ばし、弱点はどうしたら補えるかを一緒に考えて、背中を押す。

ただ、通所して訓練を重ねても、障害自体は解消されるわけではない。白石さんは「スキルアップを後押しするのと同じくらい、利用者一人一人の特性を把握

することが大事。そこがしっかり踏まえられれば、彼女らが活躍できる企業、職場につながることができる」と、社内で「アセスメント」と呼ぶ特性把握の重要性を強調する。

<自分の意思を相手に伝えられるか><作業中に自制心を保てるか><グループで活動できるか>…。

支援現場で培ったチャレンジドジャパン独自のアセスメント項目は220にも及ぶ。午前10時～午後3時が基本の利用時間を一緒に過ごす中で、それを確かめていく。

就職活動では、本人の希望を尊重した上で企業とつなぐ。どんな支援や配慮が

あればスムーズに仕事を担えるかもしっかり企業側に伝えることで、ミスマッチを防ぐ。就職がかなった後も月1回のペースで定期的に面談などを行い、定着をサポートする。

社名は「挑戦する機会を与えられた人」を意味する「Be Challenged」に由来する。白石さんは「目指すのは、障害の有無を超えて誰もが働きやすい世の中。弱者に寛容な社会は、誰もが生きやすいということを現場から訴えていきたい」と意気込む。

起業から11年。障害者雇用の地平を切り開いてきた先駆者は、自らにもチャレンジを課す。

「誰もが働きやすい世の中」を目指して

みやぎ

仕事人 列伝

チャレンジドジャパン 仙台市

白石 圭太郎さん(36) ㊦

利用者の未来 常に思い



しらいし・けいたろう 1983年仙台市出身。東北大学大学院経済学研究科修了。3年間の銀行勤務を経て2008年12月、チャレンジドジャパンを創業。09年7月の「ひゅーまにあ仙台」を皮切りに、全国26カ所[※]で就労支援センターを展開する。全国重度障害者雇用事業所協会理事。

その表情は自信に満ちていた。チャレンジドジャパンが運営する障害者就労支援センター「ひゅーまにあ仙台」に通って2年になる門馬史浩さん(24)。大学2年の時、アルバイト先でミス^{ヒミツ}を激しく叱責され、不安障害に。精神科医の勧めで2018年春から通所し、「たとえ失敗しても、その後どうするかが重要」と前を向けるようになった。

ひゅーまにあは週5日利用できる。毎朝10時の朝礼に始まり、パソコンスキルの習得やオフィスマナーの講座、体力強化のトレーニングなど、午後3時までのメニューは多岐にわたる。支援員は講座の講師を務め、利用者の質問に答え、

忙しく動き回る。

この間、支援者が心を砕くのは利用者の特性把握だ。<仕事は正確か><周囲を不快にさせる言動はないか><身なりは清潔か>…。220に及ぶ独自の項目に従って事細かに観察し、「難あり」と感じた点は利用者と共有、改善を促していく。美点を伝えることも忘れず、自信を与えて背中を押す。

ささいなことも放置しない。08年創業のチャレンジドジャパンがこれまで全国で1500人近い障害者の就労をかなえてきた背景には「利用者の未来を思えばこ

そ」の関わり方がある。社長の白石圭太郎さん(36)は「利用者と和気あいあいと過ごすのは楽。でも、それでは利用者のためにならない。親身になればこそ、言いにくいこともスルーせず、一つ一つ改善につなげることが大事」と心ずる。

仮に、ある障害者に周囲を不快にさせる行動があったとしても、素人にはそれが障害に由来するのか分からない。だから、違和感を覚えるのを恐れて、指摘をためらったりしてはいないか…。チャレンジドジャパンが利用者に親身に向き合い、就



体調管理も就労に向けた大事な要素。一日の訓練・実習はラジオ体操から始まる＝仙台市青葉区本町の「ひゅーまにあ仙台」

労の道を切り開いている営みは、今の社会が障害者を過度に腫れ物扱いしていることへのアンチテーゼでもある。

ひゅーまにあ仙台に昨年9月から通う鈴木麻佑子さん(24)は「支援員の皆さんが私のために思って言って

くださるのはありがたい」と感謝する。通所前は「人と関わるのが苦手」だったのが、今は「パソコン技術を身に付け、事務職に就きたいです」。

鈴木さんの弾んだ声に、支援員がうれしそうにうなずいた。

「親身になればこそ、言いにくいこともスルーしない」

みやぎ

仕事人 列伝

チャレンジドジャパン 仙台市

白石 圭太郎さん(36) ㊦

雇用主の開拓にも全力



指示書に沿って必要な物を必要な数だけ集める「ピッキング」の訓練。3～4人で取り組むことで仲間と協力する意識も高める＝仙台市青葉区本町の「ひゅーまにあ仙台」

世の中に障害者雇用を広げる使命を担うチャレンジドジャパンにとって、障害者を採用する企業を増やすことも重要な任務。全国26カ所で展開する就労支援センター「ひゅーまにあ」から、企業の戦力となる障害者を輩出できても、受け皿となる職場がなければ、障害者の「仕事で世の中の役に立ちたい」との願いはかなえられないからだ。

2018年に行政による水増しが発覚し、障害者雇用の重要性はより広く知られることになった。ひゅーまにあにも採用を希望する企業からの問い合わせは増えた。しかし、それで勤め先が十分確保されるわけではない。



しらいし・けいたろう 1983年仙台市生まれ。東北大経済学部在学中、障害者施設でボランティアを経験したが縁で障害者福祉に関心を深め、2008年12月、チャレンジドジャパンを創業。仙台、大崎両市と群馬県長野原町で生活介護支援施設など計9拠点を運営する社会福祉法人「チャレンジドらいふ」の理事長も務める。

社長の白石圭太郎さん(36)は「いざ採用となると戸惑う企業はまだある。具体的な受け入れ方法などを紹介しながら、本当に採用に動く企業を開拓することが欠かせない」と話す。

レジ機器販売・保守の「寺岡システム」(仙台市)は、ひゅーまにあの利用者をこれまで6人採用した実績がある。人事担当者は「皆さん確かな戦力。仕事の切り出しを進めたことで、業務の効率化もできた」と語る。

ひゅーまにあ仙台に1年半通った石川毅さんは念願かなって昨年末、仙台銀行

(仙台市)に就職した。支店に送る伝票の封入やATMの管理などを担い、「毎日充実しています」と顔をほころばせる。

3歳の時、中耳炎を患い、聴覚に障害がある。発音も周囲には聞き取りにくく、前職は意思疎通に悩んで辞めた。ひゅーまにあでは事務用品を指示通りに集める「ピッキング」などの訓練を重ね、苦手だった整理整頓を改善。難があった会話も支援員の助言で丁寧さに努め、社会性を高めた。

人事課の奥平壮史課長は「職場の信頼は厚い。事前に石川さんと話し合い、職

場の受け入れ態勢を整えていたことがスムーズな定着につながった」と振り返る。

とはいえ、世の中の全ての企業が障害者雇用に熱心なわけではない。2.2%の法定雇用率を達成した民間企業は全国で48% (昨年6月時点)。前年より2.1ポイント改善したものの、ノーマライゼーションは道半ばだ。

障害者雇用はなぜ進めなければならないのか。法律が定めるからか、働き手不足の時代だからか。

白石さんは問い掛ける。「人は人に感謝されて誇りを感じる。そこに障害の有無が関係してしまう社会にこそ、障害があるのではないか」。当事者の胸中に常に思いをはせ続ける。

「障害の有無が関係する社会にこそ障害がある」